第 37回　岡倉天心記念　がん哲学外来　巣鴨カフェ「桜」

令和４年 7月16日

言葉の処方箋　　いい覚悟で生きる　樋野　興夫　P80

あいまいなことは　あいまいに考える

人生にも世の中にもつきつめて考えられないことはいくらでもあります。
あいまいに受けとめてやり過ごすのも、知恵です。

末期がんの告知を受けると、必ずといっていいほどついてくる言葉が、「余命」です。たとえば、「余命は半年と考えられます」と、医師から伝えられるのです。そして、「その前に会いたい人に会わせてあげてください」などと言われて、本人も家族も「死」に直面します。延命治療やホスピスのこと、最期 を迎えるまでのことなどを考えます。

余命告知は、その昔に比べると、診断結果の共有という点ずいぶん直接的 になっていますが、なかなか複雑な要素を含んでいます。

医師が告げた余命よりも早く亡くなれば、医師は遺族から責められます。それよりも長く生きれば、「お医者さまの治療や手当がよかった」と感謝される こともあれば、「脅されたようなもの」と言われることもあります。

いずれにしても、余命というこの数字は確実事象ではなく、あくまでも確率 として出たものです。現在の医学では、だいたい 70 パーセントの確率と考えられています。実は、あいまいなものなのです。ですから、余命を宣告されたときは医師に、「どういう根拠でこの数字が出たのですか」とぜひ聞いてください。同じ部位にできてもがんほどその症例や治療に対する効果、転移・進行度合いに個人差が出る病気はありません。まさに十人十色です。ですから、確率事象の余命はとりあえずの目安と考えるにとどめます。

「医師から余命告知をされて、会いたい人に会っておこうと大勢に見舞いに来てもらいました。ところが、それから数年経ちますがまだこうして生きています。あのときいただいた見舞金を返した のかどうか今は迷っているんです」

がん哲学外来に来たご夫婦が真面目な顔でそう話すものですから、私は思わず笑ってしまいました。

「あいまいなことはあいまいに考えればいいではありませんか。あなたのその真面目さがお見舞いに来てくれた人たちへの贈り物と考えてみてはどうでしょう。今は余命をつきつめて考えながら生きることよりも、ご家族や友人たちと笑顔で過ごす時間を大切にしてください。余命は神の領域だから、と告知しない外国のケースだってあるんですから」

そう話すと、ご夫婦は笑いながら穏やかな様子で帰って行きました。

あいまいさの利点は柔軟性です。何事に対しても柔軟性を持って受けとめる心構えがあれば、タイミングを逃さず前向きに次のことに着手できます。柔軟性は心の強さ、しなやかさにもなるのです。

余命に限らず、あいまいなことはあいまいに受けとめることも、生きる知恵ではないでしょうか。